

## 社会福祉協議会の世代間交流型事業に参加する高齢住民の意識

### —狭山高校生Yumeプロジェクトを例に—

Attitudes of community dwelling elderly participating in intergenerational exchange projects  
of the Social Welfare Council

—A case study of the "Sayama high school students' Yume Project"—

相良 友哉<sup>1,2</sup>, 石川 大晃<sup>3</sup>, 天谷 都紀子<sup>4</sup>, 森 美咲<sup>4</sup>

<sup>1</sup>東京都健康長寿医療センター研究所, <sup>2</sup>一般社団法人福祉KtoY

<sup>3</sup>アクトインディ株式会社, <sup>4</sup>社会福祉法人狭山市社会福祉協議会

Tomoya Sagara<sup>1,2</sup>, Hiroaki Ishikawa<sup>3</sup>, Tokiko Amaya<sup>4</sup>, and Misaki Mori<sup>4</sup>

<sup>1</sup>Tokyo Metropolitan Institute for Geriatrics and Gerontology

35-2 Sakae-cho, Itabashi-ku, Tokyo, 173-0015 Japan

<sup>2</sup>General Incorporated Association Fukushi KtoY

8178 Tomigata, Ina city, Nagano, 396-0621 Japan

<sup>3</sup>Actindi, Inc

23F Mita International building, 1-4-23 Mita, Minato-ku, Tokyo, 108-0073 Japan

<sup>4</sup>Sayama City Council of Social Welfare

2-4-13 Irumagawa, Sayama city, Saitama, 350-1305 Japan

キーワード：世代間交流, 社会福祉協議会, 重層的支援体制, 地域在住高齢者

Key words : Intergenerational exchange, Social Welfare Council, Multilayered support system,  
Community dwelling elderly

#### 抄録

複雑化・複合化する地域の支援ニーズに対応するため、多世代住民が互いに支え合えるような世代間交流型の事業推進が重要である。これにより、高齢であっても能力やスキルに応じて支え手になることが可能である。ただし、世代間交流型の事業に参加している高齢者の特性や意識については十分に明らかでない。そこで本研究では、狭山市社会福祉協議会が実施している「狭山高校生Yumeプロジェクト」を事例に、どのような高齢者が世代間交流型の事業に参加しているか、何が活動のモチベーションやメリット、課題に感じているか検討した。継続的にプロジェクトに参加している高齢者6名へのインタビュー調査の結果、社協職員からの声掛けが参加の端緒になっており、多くが個人的な関心や次世代育成意識（ジェネラティブティ意識）がモチベーションになっていることが明らかになった。プロジェクトに参加した高齢者は活動に対して肯定的な考えを持っており、課題として挙げた点も次につながる建設的な意見であった。

今後、すでに社協とのつながりを持っている高齢者のみならず、地域在住の一般の高齢者に対しても働きかけて、新たなつながりを作っていくことで、担い手として世代間交流型のプロジェクトに継続的に参加する高齢者をさらに増やしていくことも重要である。

#### 1. はじめに

わが国の急速な少子高齢化と核家族化の進展によって、地域住民が抱える支援ニーズが複雑化・複合化しており、従来の支援体制では十分な対応

が困難であることが指摘されている<sup>[1]</sup>。その対応策として、世代や属性を問わないⅠ.相談支援、Ⅱ.参加支援、Ⅲ.地域づくりに向けた支援をする事業を通じた「重層的支援体制」の構築により、子ど

もから高齢者までをシームレスにつなぐ、全世代型の包括的な地域戦略を作ることが求められる<sup>[2]</sup>。

そのため、多世代住民を対象にした世代間交流型の事業を推進し、互いに支え合えるような地域づくりが重要であると考えられる。その際、行政の限られた財源や人材を最大限に効果的に配分するためには、従来型のハイリスク・アプローチではなく、むしろ、ポピュレーション・アプローチで地域全体に満遍なく事業効果を行き渡らせ、なるべくハイリスク者を増やさないよう予防していくという意識が重要だろう。これにより、全ての住民が各々の状況にあわせて地域の中で等しく「社会参加」をすることができ、さらには地域共生社会の実現にも資するものと考えられる。

ただし、地域住民への支援を行っている市町村保健センターの事業について検討した相良ら<sup>[3]</sup>の研究では、全世代の住民を対象にした事業は全体の1割にも満たなかったことが示されており、行政が主体となって多世代住民を対象とする保健福祉事業を展開することは容易でないと推察される。実際、令和3年度までに重層的支援体制整備事業を実施しているのは全国42自治体に留まっており、多くの自治体では、令和4年度以降に導入あるいは移行準備予定とのデータもある<sup>[4]</sup>。

現在、行政以外のセクターにおいて、地域福祉の中核を担っているのは社会福祉協議会（以下、社協）である。従来、社協は何らかの支援を必要とする人たちへの見守り、声かけ、手助け等の支え合い活動や配食サービス、移送サービス等の在宅福祉サービスを実践してきたが、2020年6月に「地域共生社会の実現のための社会福祉法等の一部を改正する法律（令和2年法律第52号）」が公布されたことにより、全国の社協でも重層的支援体制整備事業に着手した<sup>[5]</sup>。しかし、重層的支援

体制整備事業においては、住民同士の支え合いも重視されている<sup>[1]</sup>。そのため、専門職から住民に向けての一方向での支援よりも、むしろ、住民同士の互助的関係を醸成できる事業が重要であると考えられる。特に、昨今は地域の高齢者が若年世代のサポートをするような取組みも散見される。ただし、そこに参加する高齢者がどのようなルートで参加するか、どのような関心を持っているか、事業を通じて何を感じたか、その知見は十分に蓄積されていないようである。

そこで、本研究では、社協の世代間交流型の事業を取り上げて、高齢世代と若年世代との互助的関係の醸成に資する事業展開に必要な要素を検討するため、その事業に参加している高齢者の特性や意識について明らかにすることを目的とした。

## 2. 方法

### 2.1. 調査対象者及び方法

本研究では、埼玉県狭山市社会福祉協議会が実施している「狭山高校生 Yume プロジェクト（以下、Yume プロジェクト）<sup>[6]</sup>」に参加している高齢者のうち、2021年に2回以上、高校生との活動に参加した高齢者6名を対象に、インタビュー調査を実施した。

Yume プロジェクトは、「高校生のやってみよう！を地域（狭山市）の人たちとの関わりの中で実現する」ことを目指して、狭山市社協が2021年度より実施している事業である。2021年度は、狭山市在住あるいは狭山市内の高校に通学している高校生に対してプロジェクトの広報を行った。狭山市内には6つの高校があるが、2021年度の参加者は、そのうち4校に通う高校生だった。プロジェクト途中からの参加や離脱もあったが、延べ42名の高校生がプロジェクトに参加した。

表1 3つの小プロジェクト

① ベンチプロジェクト	「高齢者の方々の外出促進。街に彩りを、暮らしを便利に。」という活動目標を立て、市内の公園等にある老朽化したベンチを高齢者と高校生で綺麗に作りかえる活動を実施した。
② ゲームプロジェクト	高齢者の交流と認知症予防を目指して、高齢者と高校生が一丸となってオリジナルのカードゲーム作りを実践した。
③ 映画プロジェクト	地域のPRや地域活性化等も目指して、高齢者と高校生と一緒に狭山市内を舞台にした映画の台本を作り、撮影を行った。

地域の高齢者を対象にした社会福祉協議会の事業は散見されるものの、多世代協働型の事業に関する知見はほとんど見られない。Yume プロジェクトは、高校生がやりたいことを地域の高齢者が支援するという設計であり（表 1）、社会福祉協議会が実施している多世代協働型の事業としては、他に類を見ない。そのため、若い世代の活動支援を行っている高齢者の特性や意識について検討する上で貴重なデータであると考えられる。6 名の高齢者へのインタビューは、昨今の社会情勢を鑑みて、実施時期を熟慮し、新型コロナウイルス感染症の新規感染者が一時的に減少した 2022 年 6 月に、いずれも半構造化面接法にて 10 分～20 分程度の短時間で実施した。インタビューに際しては、それぞれ個別に行った。冒頭で本調査の趣旨説明を行い、対象者から調査への参加及び会話内容の録音についての同意を得た上で、IC レコーダーに録音しながら実施した。

## 2.2. 調査内容

インタビュー調査では、①プロジェクトへの参加動機、②継続的に参加するモチベーション、③高校生との活動で得られたメリット、④高校生との活動で感じた課題などを尋ねた。

## 2.3. 分析方法

グレッグらの整理により、質的研究の特徴として「研究される人々の視点（内部者の視点）」を持ち、「帰納的に分析されること」で「現象について全体的（系統的、包括的、統合的）な見方を得る」ことが挙げられている<sup>7)</sup>。本研究では、Mayring の

要約的内容分析のやり方を参考にしながら、質的かつ帰納的な分析を実施した<sup>8)</sup>。具体的には、IC レコーダーの録音データを文字起こしして、対象者ごとに逐語録（会話スクリプト）を作成した。それぞれの会話スクリプトを元に、質問項目ごとに回答内容を整理し、筆者らの協議により、帰納的にカテゴリー化を行い、概念化を目指した。

## 2.4. 倫理的配慮

個人情報保護の観点から、録音データはいずれもパスワードをかけたコンピュータに格納し、ファイル自体にも別途パスワードをかけた状態で管理している。また、逐語録の作成にあたっては、必要に応じて固有名詞をアルファベット表記し、匿名化の措置を講じている。これらの対策については、先述の通り、インタビュー調査の際に対象者へ十分な説明を行い、同意を得ている。

このように、本研究は十分な倫理的配慮のもとで実施された。

## 3. 結果

### 3.1. 回答者属性

インタビューを実施した 6 名の対象者は全員が埼玉県狭山市内の在住者であった。年代は 70 歳代が 3 名で 80 歳代が 3 名、性別は男性が 5 名で女性が 1 名であった。また、6 名のうち 4 名が第 1 層あるいは第 2 層協議体のメンバーであり、個人ボランティアとしての参加者は 2 名であった。ただし、この 2 名も過去に協議体メンバーとして社協の事業に参画してきたという経緯がある（表 2）。

表 2 回答者の属性

対象者	性別	年齢	所属
A	男性	70 歳	第 2 層協議体
B	女性	80 歳	個人ボランティア ※元第 2 層協議体
C	男性	73 歳	第 2 層協議体
D	男性	72 歳	個人ボランティア ※元第 2 層協議体
E	男性	80 歳	第 1 層協議体
F	男性	80 歳	第 1 層協議体 第 2 層協議体

3.2. プロジェクトへの継続的参加の動機  
インタビューの結果をカテゴリごとに整理したものを表3に示した。

Yumeプロジェクトへ継続的に参加している高齢者は、全員が社協職員からの個人的な声掛けや

勧誘がプロジェクト参加の動機になっていることが明らかになった。これらを集約した上位カテゴリを1つ生成して、「社協職員の声かけ」と命名して一般化した。

表3 高齢者へのインタビューまとめ

質問内容	上位カテゴリ	主なコード
プロジェクトへの参加動機	社協職員からの声かけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社協の担当者に誘われた</li> <li>・是非参加して欲しいと社協から声がかかった</li> <li>・社協とのご縁の延長線上</li> </ul>
継続的に参加するモチベーション	個人的関心	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで自分が市民大学でおこなってきた活動と似ており関心がある</li> <li>・活動自体が脳トレになると感じた</li> </ul>
	次世代支援意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校生の本気の様子を見て応援したくなった</li> <li>・高校生と関われる機会だから</li> <li>・高校生の福祉観や地域観に関心をもった</li> <li>・地域活動をする若い世代を増やすための動きが必要だと感じている</li> </ul>
高校生との活動で得られたメリット	若いエネルギーの受容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しさやパワーを貰っている</li> <li>・高校生のメンバーを見ると女性が元気で活発</li> <li>・楽しいし元気づけられる</li> </ul>
	高校生の価値観や考え方を理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校生の考えを知れたこと</li> <li>・我々（シニア）と違う柔軟な発想や考え方に触れることができた</li> </ul>
高校生との活動で感じた課題	参加者が少ない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プロジェクトに関わる大人が少ない</li> <li>・もう少し多くの高校生に参加してほしい</li> <li>・社協はもっと地域の人に声をかけるべき</li> </ul>
	設計上の課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学生にも地域と関わるための機会を作ってあげる必要がある</li> <li>・もっと社会性のあるテーマに切り込むべき例) SDGs, ヤングケアラーなど</li> <li>・きちんと発表の場を作ってあげるべき</li> </ul>
その他に感じたこと	次の活動への提案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後はシミュレーションにとどまらずに、成果物として何かモノを生み出していきたい</li> </ul>
	若者への期待・羨望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の小さい頃に比べて今の高校生は何でも出来て羨ましい</li> <li>・真剣に取り組んでいて良いと感じる</li> </ul>

3.3. 継続的に参加するモチベーション  
次に、プロジェクトに継続して参加している理由を尋ねたところ、過去に自身が行ってきた活動との類似性、脳トレになると感じていること、高校生と関わって活動を応援したい、地域活動をする若者を応援し増やしていきたい等の回答を得た。これらを集約して2つの上位カテゴリを生成し、

それぞれ「個人的関心」「次世代支援意識」と命名して一般化した。

### 3.4. 高校生との活動で得られたメリット

活動によるメリットとして、高校生から楽しさやパワーを感じて元気づけられているとの回答が多く見られた。また、高校生の柔軟な発想や考え

方に触れ、若者への理解が進んだことを挙げた高齢者も見られた。これらを集約して2つの上位カテゴリーを生成し、「若いエネルギーの受容」「高校生の価値観や考え方を理解」と命名して一般化した。

### 3.5. 高校生との活動で感じた課題

一方で、一部の高齢者は活動を通じて課題も感じていた。プロジェクトに関わる大人（高齢者）や高校生が少ない、あるいは社協がもっと多くの地域住民に声をかけるべきだと感じている人が複数見られた。また、中学生も対象にすべきとの意見や、社会性のあるテーマを扱うプロジェクトにした方が良いという意見もあった。さらに、プロジェクトの最後には、何かしらきちんと全体発表の場を設けることが望ましいとの考えを持っている人もいた。これらの意見を集約して、「参加者が少ない」「設計上の課題」と命名する2つの上位カテゴリーを生成して一般化した。

### 3.6. その他、感じたこと

最後に、Yumeプロジェクトに参加して感じたその他の意見について尋ねたところ、成果を伴うものづくりをしたいという意見や、高校生に対する肯定的な考えを見てとることができた。これらを集約し、2つの上位カテゴリーを生成して、「次の活動への提案」「若者への期待・羨望」と命名した。

## 4. 考察

地域の中における多世代住民の支え合い活動を一層推進していくために、本研究では、社協が実施している世代間交流型の事業を取り上げ、そこに参加する高齢者の特性や意識について検討した。その結果、プロジェクトの参加動機については「社協職員からの声かけ」、継続的に参加するモチベーションについては「個人的関心」と「次世代支援意識」、高校生との活動で得られたメリットについては「若いエネルギーの受容」「高校生の価値観や考え方を理解」、高校生との活動で感じた課題については「参加者が少ない」「設計上の課題」、その他に感じたことについては「次の活動への意欲」「若者への期待・羨望」という上位概念をそれぞれ生成した。

プロジェクトへの参加動機は、社協職員からの声かけが主であった。地域包括ケアシステムの実

現に向け、2015年の介護保険制度改正を踏まえ、各市区町村では、地域特性に合わせて地域の多様なステークホルダーが参加する「協議体」を設置し、それぞれ生活支援コーディネーター（SC）が配置されている<sup>[9]</sup>。自治体全域を対象とする第1層および、各日常生活圏域（中学校区域等）を対象とする第2層の生活支援コーディネーターが連携しながら、地域の互助力強化と支え合いの可能な地域づくりの推進に向けた働きかけを行っている。SCの多くは社協や地域包括支援センターに配置されており<sup>[10]</sup>、窓口での相談支援や協議体での意見交換、また地域でのアウトリーチ活動等を通して、地域住民への様々な情報提供や、支援が必要な人を制度につなげるための橋渡し、社会資源の把握、地域に不足するサービスの創出や担い手の養成等の資源開発を担っている。今回、Yumeプロジェクトに参加していた高齢者の多くは第1層や第2層協議体のメンバーであり、それ以外の高齢者も過去に協議体のメンバーだった経験があるなど、現在も個人ボランティアとして社協の諸活動に積極的に参加している。それ故、一般の高齢住民よりもSCなど社協職員との繋がりが密接であり、プロジェクトへの勧誘がしやすかった可能性がある。そのためには、SCをはじめとする社協職員が、日頃から多世代の地域住民との関係構築をしておく必要がある。SC以外にもコミュニティソーシャルワーカー（CSW）や地域福祉コーディネーター等が配置されている社協も多い。地域福祉の専門職がもっとコミュニティに出向いて多世代の住民と関係性を構築しておくことで、若年世代のニーズを把握しやすくなり、地域課題の解決に資する企画に高齢世代を巻き込みやすくなると思われる。

継続的に参加するモチベーションとしては、個人的な興味関心のほかに次世代支援意識を挙げる人が多かった。これは、Eriksonが提唱し、「次世代を確立させ導くことへの関心」と定義したジェネラティビティ（Generativity）の理論にも合致する<sup>[11][12]</sup>。高齢期の心理社会的な発達段階として、次なる世代、新たな社会の構築に積極的に関わっていきたいと考える高齢者が高校生の地域活動に継続して参加していると考えられる。

高校生との活動で得られたメリットについては、若いエネルギーの受容と、それによる高校生の価値観や考え方の理解を挙げる人が多かった。急速

な核家族化により、高齢者の単独世帯や夫婦のみ世帯の割合が年々増加している<sup>[13]</sup>。そのため、日常生活の中で、また地域の中で若年世代との交流がある高齢者は多くないと考えられる。このような背景から、活動に参加している高齢者は、地域の若者との世代間交流を通じてエネルギーを貰い、活動を通じた相互理解が進んだことをメリットに感じたと考えられる。

反対に、プロジェクトに関わる人が少ないことや、プロジェクトの設計の仕方について課題意識を持っていることも明らかになった。課題意識を持っている高齢者は、事業ターゲットを広げもっと多くの学生や地域住民に参加してほしい、社会性のあるテーマについて若者とともに考えたいといったような意見を持っていた。積極的に関わる中で、プロジェクトをより良くしたいと感じ、このような問題意識が生まれたのだと推察される。先述の通り、本調査に回答をした高齢者は、普段から社協の活動に積極的に参加している傾向にあり、積極的に地域社会と繋がり、より良い地域を作っていこうとする意識が強いと考えられる。そのため、比較的ポジティブな視点から、今後のプロジェクトの改善に資するような課題が示されたのだろう。堀口らの研究<sup>[14]</sup>によると、高齢者が自律的に社会的活動に参加するには「他者との関係性」が重要であることが示唆されている。Yumeプロジェクトが若者や社協職員も参加して皆で進めるプロジェクト型の事業だったことが、高齢者の積極的な参加と意見表出の動機になった可能性がある。

その他に、次の活動への意欲や若者への期待・羨望を感じている高齢者も見られた。田淵らの研究では、高齢者と若年者が協働して新しい課題に取り組んだ方が、同世代の者同士で課題を実施した場合よりも活発な「提案的要求（相手に提案をするための発話）」が見られることを明らかにしている<sup>[15]</sup>。Yumeプロジェクトも、高齢者と高校生が一緒になって地域の想像的課題に取り組むという点で共通している。そのため、同じような機序で高齢者から高校生に向けて、次の活動への提案という要素が見られたのだろう。また、根本らの研究において、世代間交流をしている高齢者は、世代内交流のみ、あるいは他者との交流をしていない高齢者よりも精神的健康度が高いことが示されている<sup>[16]</sup>。そのため、Yumeプロジェクトに参加し

た高齢者の多くが、高校生との活動に対してポジティブで前向きな感情を抱いたのだと考えられる。

ただし、本研究は次の点で課題も残っている。第一に、今回の研究は一か所の社協が実施している世代間交流型の事業に参加した高齢者のみを対象にしたケーススタディである。そのため、仮に、他の地域で同様の事業を行った場合にも本研究と同じ結果が得られるかどうか分からない。インタビュー対象者も限定的であり、また聞き取りに費やすことが出来た時間も限られていた。そのため、理論的飽和には至らず、M-GTA等の手法を用いて結果図やストーリーラインを構成することは難しかった。この点は、続く研究において検討をしたいと考えている。第二に、インタビューに参加してくれた高齢者は、Yumeプロジェクトが始まる前から日常的に社協職員との繋がりがあり、そもそも積極的な社会活動を実践している集団であった可能性もある。そのため、社協との繋がりを未だ持っていない地域在住の一般の高齢者に対して働きかけていくことも重要である。果たして、社協との繋がりが一般の高齢者も積極的に参加してくれるのか、またポジティブな感情を抱くかどうかについては分からないため、その点について検証が望まれる。本研究は、小規模なケーススタディであるが、本稿の分析により複数のカテゴリーを生成した。これらの結果をもとにして、更なる調査を実施し、一般の高齢者も世代間交流型の地域活動への参加ニーズがあるのか、参加によりポジティブな感情を抱くか検討し、より一般化をはかっていく必要があるだろう。第三に、本稿は事業に参加した高齢者に注目したインタビュー調査の結果を報告するにとどまっている。多世代の関係を捉えるうえでは、当然参加した高校生についての分析も必要である。また、3.5.でも示した通り、中学生など高校生以外の多様な世代の参加も求められる。これらの点については、本稿では十分に検討が出来ておらず、続く研究における課題として残されている。

総じて、本研究は、限定的な対象者へのインタビュー結果を定性的に検討したケーススタディに過ぎず、この結果のみを持って一般化をすることは出来ない。ただし、本研究で得られた知見や概念は、続く研究への足掛かりとして、活用していくことが可能であると考えられる。

## 5. まとめ

前述のような課題を考慮する必要があるが、本研究は、社協における世代間交流型の事業に継続的に参加した高齢者の特性や意識について初めて検討したものである。

その結果、プロジェクトへの参加は社協職員からの勧誘が端緒になっており、活動を通じて、元々ジェネラティブ意識が低い高齢者でも若年者とともに活動をするなかでジェネラティブ意識が芽生え、ポジティブな意識を持って継続的にプロジェクトに関わっている可能性が示唆された。そのため、まずは、社協職員が地域在住の高齢者をはじめ、多世代の住民に対して積極的に働きかけることで活動に参加してもらう人を増やすということが重要である。その際、活動が高齢者のジェネラティブ意識をくすぐるような次世代貢献的な内容を含むものであれば、なお良いだろう。

今後の研究では、本研究で得られた知見が他のケースにも当てはまるか、様々な観点から検討するとともに、継続して世代間交流型の事業に参加している高齢者の心的変容等を検討することで、更なる一般化についての議論が求められる。

## 謝辞

本研究の実施にあたり多大なるご協力をいただいた、狭山市社会福祉協議会の皆さん、ならびにインタビュー調査にご参加いただいた6名の高齢者の皆様に深く感謝いたします。

## 引用文献

- [1]厚生労働省. “図表 2-5-2 地域住民の複雑化・複合化した支援ニーズに対応する市町村の重層的な支援体制の構築の支援”.  
<https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/19/bacldata/01-02-05-02.html>, (参照 2022-8-18).
- [2]藤原佳典. 地域共生社会に向けた重層的支援体制整備事業と多世代アプローチ：保健・福祉分野の連携の視点から. 日本世代間交流学会誌. 2022, 11(2), p.31-37.
- [3]相良友哉ほか. 市町村保健センターの多世代住民に向けた事業における連携体制の実態に関する検討. 日本世代間交流学会誌. 2020, 9(2), p.3-12.

- [4]厚生労働省社会・援護局地域福祉課地域共生社会推進室. “重層的支援体制整備事業について”.  
<https://www.maff.go.jp/kanto/keiei/keiei/shougai/event/attach/pdf/220331-1.pdf>, (参照 2022-8-18).
- [5]全国社会福祉協議会. “Action Report 第186号”.  
[https://www.shakyo.or.jp/ActionReport/ActionReport\\_v186-0201.pdf](https://www.shakyo.or.jp/ActionReport/ActionReport_v186-0201.pdf), (参照 2022-8-18).
- [6]狭山市社会福祉協議会. “市内高校生集まれ！狭山高校生 Yume プロジェクト【メンバー募集説明会@オンライン】参加者大募集！！”.  
<https://www.sayama-shakyou.or.jp/information/2022/06/yume.html>, (参照 2022-8-18).
- [7]グレッグ美鈴ほか(編著). よくわかる質的研究の進め方・まとめ方看護研究のエキスパートをめざして. 医歯薬出版株式会社. 2007, p.16-40.
- [8] Mayring, P. (2000). Qualitative Content Analysis. Forum: Qualitative Social Research, 2000, 1(2), Art. 20.
- [9]隅河内司. 生活支援コーディネーターの現状と課題ー相模原市社会福祉協議会の取り組みからー. 田園調布学園大学紀要. 2018, 13, p.81-99.
- [10]黒宮亜希子. 生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)に関する文献研究. 吉備国際大学研究紀要(人文・社会科学系). 2020, 30, p.1-7.
- [11]Erikson, E.H. et al. The Life Cycle Completed A Review Expanded Edition, W. W. Norton. 1997. 村瀬孝雄・近藤邦夫訳. 『ライフサイクル, その完結<増補版>』みすず書房. 2001, p.84.
- [12]Erikson, E. H. Childhood and society. New York: Norton. 1950. 仁科弥生訳. 『幼児期と社会 I』みすず書房. 1977, p.345-347.
- [13]内閣府. “令和4年度版高齢社会白書”第1章 高齢化の状況, 第1節 高齢化の状況 3 家族と世帯.  
[https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/zenbun/pdf/1s1s\\_03.pdf](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/zenbun/pdf/1s1s_03.pdf), (参照 2022-8-18).
- [14]堀口康太ほか. 高齢者の社会的活動への動機づけと他者との関係性の関連ー活動内の仲間関係, 配偶者, 子供, 孫の4側面に着目した検討ー. 教育心理学研究, 2018, 66, p.185-198.
- [15]田淵恵ほか. 創造的課題における高齢者と若年者の世代間相互作用の特徴. 老年社会科学. 2019, 41(3), p.322-330.
- [16]根本裕太ほか. 若年層と高年層における世代内/世代間交流と精神的健康状態との関連. 日本公衆衛生雑誌. 2018, 65(12), p.719-729.

---

**Abstract**

---

As a measure to respond to the support needs of the community, which is becoming more complicated and complex, it is important to promote intergenerational exchange projects that allow multigenerational residents to support each other. Such policies may enable elderly people to become not only recipients of support, but also supporters according to their abilities and skills. However, the characteristics and attitudes of the elderly who participate in such projects are not sufficiently clear. In this study, we referred to the "Sayama High School students' Yume Project" conducted by the Sayama City Social Welfare Council to examine what kind of community dwelling elderly participate in this project and what kind of attitudes they have in the activities. Interviews for six elderly people who have been participating in the project on a continuous basis revealed that their participation in the project began when they were approached by Social Welfare Council staff, and that many of them have fostered or strengthened their awareness of the next generation (Generativity) through the activities. There were also some elderly people who had opinions on how to promote better projects. In order to increase the number of community dwelling elderly who continue to participate in intergenerational exchange projects as supporters, it is important to reaching out not only those who already have ties with social welfare council, but also to the community dwelling elderly.

---

(受付日：2023年3月3日，受理日：2023年6月8日)

**相良 友哉 (さがら ともや)**

現職：東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加と地域保健研究チーム 非常勤研究員

東京都健康長寿医療センター研究所において、超高齢化社会に向けた高齢者の社会参加のあり方や、多世代共生型の地域づくりに関する研究と実践を行っている。市民社会論を中心に、老年社会学、世代間交流学などを専門としている。その傍ら、一般社団法人福祉 KtoY の理事として、保健医療福祉業界の施設や職員の実態調査や担い手の育成に関わる事業にも携わっている。